



Vol.13

2012年8月31日

日本災害復興学会

# News letter

## 目次 -contents-

1 「帰還・再生」をテーマに福島大会

2 2012年大会大会・詳報

3 復興支援に事業公募

○東日本大震災被災地・被災者支援 セミナー & 相談会 & 音楽会開催事業

○みなし仮設住宅制度研究シンポジウム

○住宅復興・居住地再生のための「定住」と「移動」のあり方を考える研究セミナー

4 スタートした連続公開セミナー「災害多発時代を迎えて」

奥尻島復興研修会レポート

5 復興応援通信

○makenaizone.jp 青木正美

○チーム北リアス 瀧美公秀

6 消息

現場から

○止まった時間 所澤新一郎

## 「帰還・再生」をキーワードに福島大会

10月6日—8日の3日間

福島駅西口の複合施設「コラッセふくしま」をメイン会場に

日本災害復興学会は2012年学会大会を10月6日—8日の3日間、福島市の複合施設「コラッセふくしま」で開催する。

東日本大震災から約1年半。今なお原発事故による避難が続く福島県だが、放射線被爆の問題もあって、立ち入り規制が続ぎ、復興学会員といえど、全容を把握している人は少ない。そこで、実行委員会では、初日にエクスカージョンを企画。まず、現地を見てもらい、そのうえで、テーマ別セッションで課題を共有し、最終日の研究発表、シンポジウムに臨んでもらうという、いつもとはやや順番が異なる大会日程を組んだ。

### ◇大会プログラム◇

《6日(土)》

●エクスカージョン

### ▽Aコース

JR福島駅を出発し、郡山市内の仮設住宅を見学。帰還が始まっている双葉郡川内村を視察するコース

### ▽Bコース

JR福島駅を出発し、飯館村や相馬市を視察。可能であれば車中から南相馬の津波被災地を見学するコース。両コース共に事前申し込み・実費が必要。

### 《7日(日)》

●分科会

9:30～12:00

分科会1 復興人材

分科会2 復興まちづくり

14:00～16:30

分科会3 広域避難

分科会4 生業・生活再建

●全体会議 16:45～18:00

●交流会 18:30～

(会費：5000円)



### 《8日(月)》

●研究発表 9:30～12:00

研究発表1「特定論題」

研究発表2「自由課題」

●大会記念特別公開シンポジウム 13:30～

▽特別講演

平野達男・復興大臣(予定)

▽シンポ・テーマ「ふくしまへの帰還と再生」

▽パネリスト

天野和彦(福島大学)▽迫

田朋子(NHK)▽平野祐

康(前三宅村長)▽馬場有(浪江町長)

▽コーディネーター

鈴木浩(福島大学名誉教授・

明治大学客員教授)

(詳細は各面に)

※学会現況(2012年8月22日)  
現在の会員 345  
正会員 312・学生会員 22  
購読会員 4・賛助会員 7

発行人 室崎 益輝 TEL:0798-54-6996 FAX:0798-54-6997 Web:http://f-gakkai.net/  
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号 関西学院大学災害復興制度研究所気付

### 分科会 1【復興人材】

▽趣旨：東日本大震災の被災地で、復興の触媒となる「復興人材」の活動状況を紹介し、地域が主体性をもって再建するうえで、「復興人材」が、どのような役割を果たせるのか。また、どのような仕組みがあれば、その活動を長期的に支えることができるのかを考える。

▽登壇者：いわて連携復興センター、おらが大槌夢広場、仮設住宅支援北上協働チーム、雄勝町復興サポーター、からくわ丸、復興六起支援コンソーシアム、富岡町生活復興支援センター、吉本興業福島県担当などのメンバー。司会・宮本匠（京都大学防災研究所）

中越防災安全推進機構共催

### 分科会 2【復興まちづくり】

▽趣旨：東日本大震災の被災地で、過去災害で蓄積されたまちづくりのノウハウをいかに収集・活用するか、きめ細かな心配りと膨大な作業を要する合意形成に、どのような支援をするのか。外部からの人材に求められる役割とは何か、など、復興まちづくりの課題を探る。

▽登壇者：野崎隆一（ひょうごまちづくり専門家派遣事業により気仙沼・南三陸を支援）、西尾久和（兵庫県西宮市より女川町へ長期派遣）、國澤正明（UR都市機構より山田町へ長期派遣）。コメンテーターは桜井誠一（神戸市の災害派遣アドバイザー）。司会・福留邦洋（東北工業大学）

### 分科会（10月7日）

- 会場：コラッセふくしま 5F（JR 福島駅前）  
分科会①「復興人材」研修室 AB  
分科会②「復興まちづくり」小研修室  
分科会③「広域避難」研修室 AB  
分科会④「生業・生活再建」小研修室
- 時間：午前の部：9:30～12:00  
午後の部：14:00～16:30
- 全体会議＝各分科会からの報告  
16:45～18:00

## 2012年学会大会 詳報

### エクスカーション（10月6日）

- a) 川内村コース  
・集合：午前9時（JR 福島駅前）午前10時（JR 郡山駅前）  
・内容：郡山市内の仮設住宅を見学、帰村が始まっている川内村を視察
- b) 飯館村・南相馬コース  
・集合：午前9時30分（JR 福島駅前）  
・内容：飯館村の除染モデル事業などを視察、午後は相馬工業団地仮設住宅仮設受託などを見学
- 参加費：4,000円  
※マイクロバス利用。催行人数に達しない場合は、変更あり。
- 申込方法：申込アドレス（excursion.fukko@gmail.com）に①氏名、②所属機関、③希望コース（A/B）、④連絡先（携帯電話）の各項目をお知らせください。

### 研究発表（10月8日 9:30～12:00）

- 会場：コラッセふくしま 5F（JR 福島駅前）
- 研究発表「特定論題」研修室 AB  
研究発表「自由課題」小研修室
- テーマ：特定論題「東日本大震災」自由課題「災害復興」
- 発表時間：15分（発表12分、質疑応答3分）

### 公開シンポジウム（10月8日 13:30～16:00）

- 会場：コラッセふくしま 4F（多目的ホール）

### 分科会 3【広域避難】

▽趣旨：原発事故による避難は、一部で帰郷が始まっているが、依然として全国各地への広域避難は6万人を超える。元の居住地に長期間帰還できない恐れがあることから、福島県内にセカンドタウンなどをつくらうとの提案もある。避難者を受け入れた全国の自治体の今後の対応は。

▽登壇者：中村美紀（山形避難者母の会）、市村高志（とみおか子ども未来ネットワーク）君嶋福芳（とちぎ暮らし応援会運営委員）、津賀高幸（東日本大震災支援全国ネットワーク）、田並尚恵（川崎医療福祉大学）、山中茂樹（関西学院大学）。司会・所澤新一郎（共同通信）

### 分科会 4【生業・生活再建】

▽趣旨：被災者の雇用創出活動や復興グッズの企画販売による被災者の生業支援活動、あるいは被災地に新たな特産品を生み出そうとしている活動などを紹介する。併せて、現在の被災地における生業支援の意義、その限界や今後の課題について議論を深める。

▽登壇者：リアス NPO サポートセンター、はらがま朝市クラブ、気仙沼復興協会、RING-PROJECT、テラ・ルネサンス、盛岡博報堂、SAVEIWATE、おだがいさま工房のメンバーら。

司会・永松伸吾（関西大学）  
Cash For Work-Japan との共催

# 復興支援に事業公募 3件を採択

日本災害復興学会は、今年度、東日本大震災の被災地復興を加速させる支援の一助になる事業を会員から公募、3件を採択した。総予算の枠は約150万円だったが、採択総額は約170万円となった。事業概要を紹介する。

## 【東日本大震災被災地・被災者支援 セミナー & 相談会 & 音楽会開催事業】

(申請者 = 出口俊一・兵庫県震災復興研究センター事務局長、予算 = 63万円)

2012年11月24、25日、被災者、自治体関係者らとともに復興まちづくりや町の今後について考えるセミナーと、住民対象の相談会を開催。

宮城県亶理町で町役場や地元住民団体と協力して事業を実施する。

阪神・淡路大震災の復旧・復興にかかわった弁護士、まちづくりの専門家や当事者、行政職員ら7人がチームを組む。

合わせて、阪神・淡路大震災で被災し、神戸を拠点に活動するソプラノ歌手深川和美さんによる「童謡サロン」も開く。

事業に参画するメンバーは東日本大震災後、亶理町の被災者と交流を続け、東北各県の自治体関係者や政府への提言も積極的に行ってきた。災害救助法の徹底活用を訴える書籍の執筆にもかかわっており、そうした経験を相談会やセミナーに生かす。

亶理町はイチゴ産地として知られ、住宅や生活の再建と同時に農業復興も大きな課題となっている。事業の広報は町役場が協力。終了後も継続的な支援を考えている。

## 【みなし仮設住宅制度研究シンポジウム】

(申請者 = 鳥井静夫・みなし仮設住宅制度研究会代表、予算 = 40万1340円)

10月12日、宮城県仙台市青葉区一番町4丁目の仙台市市民活動サポートセンターで開催する。開会は午後1時。仙台市市民協働活動推進課の協力を得て市民参加も呼びかける。

提供された。従来のプレハブ住宅に比べ、居住性は高まったものの、広域に点在しているため、生活実態の把握が困難で情報・物資提供等の支援格差が生じている。

東日本大震災では、民間賃貸住宅の借り上げによる「みなし仮設住宅」が応急仮設住宅全体の半数弱も

今後この制度が恒久化されようとしていることから、同制度に内在する課題を検証、こんごの方向性を

探ろうとの試みだ。

当日は、復興学会理事で立命館大学政策科学部の塩崎賢明教授が基調講演。続いて、鳥井代表が「みなし仮設住宅における被災者生活再建に及ぼす諸問題と今後のあり方について」(仙台市の事例を通じて)、京都大学公共政策大学院の加藤尚志氏が「みなし仮設住宅における孤独死対策のあり方」について報告する。

このあと、仙台市の寺内譲・生活再建支援部部長、被災者の青野哲大氏らとを交え、パネルディスカッションを展開、会場参加者との意見交換も予定されている。

情報はFacebook専用ページを開設するなどして広報する。

## 【住宅復興・居住地再生のための「定住」と「移動」のあり方を考える研究セミナー】

(申請者 = 田中正人・都市調査計画事務所代表取締役、予算 = 70万円)

東日本大震災の住宅復興、居住地再生を進める上で、自治体関係者や支援者に役立つ情報を発信する。

画、建築分野の専門家や研究者6人。阪神・淡路大震災など過去の災害での経験や、それぞれが持つ東日本大震災の被災地とのつながりを生かす。

復興に向けた「提案」や「提言」ではなく、その基礎となる知見、アイデアの提供に重点を置く。

主な事業は2つある。ひとつは、支援者向けのフリーペーパー「アンテナ」の発行。紙媒体と電子版を同時に発行する。

例紹介、東北の被災地で活動する支援者の報告などもある。

もうひとつの事業は、来年2月に被災地で開く公開セミナー。

それまでの情報発信や研究の成果を総括する場と位置付けている。

8月に創刊号(6ページ、2000部)を出しており、来年3月までに計4回を予定している。

「リジリエンス」について考える連載のほか、過去の災害での居住地再生の事例紹介、東北の被災地で活動する支援者の報告などもある。

「災害多発時代を迎えて」  
スタートした連続公開セミナー  
来年3月まで計7回開催の予定  
関学丸の内キャンパス会場に

日本災害復興学会は、関西学院大学災害復興制度研究所と共催で、今年5月から、関西学院大学東京丸の内キャンパスを会場に連続公開セミナー「災害多発時代を迎えて」を月一回のペースで開いている。

会場は、東京駅日本橋口のサピアタワー10階にある関学丸の内キャンパス。第1回は5月20日の「東日本大震災と震災遺児」。遺児支援・奨学団体「あしなが育英会」や「全国父子家庭支援連絡会」の協力を得て実施した。次いで、6月10日には「想定見直し 首都直下地震」、7月14日には「東日本大震災と高

台移転」の各テーマで各分野の専門家を招き、被災地や災害列島が抱える課題と対応策について話し合った。復興学会では、昨年、東日本大震災の発生とともに東京と関西で「東日本大震災復興支援研究会」を4月から9月にかけて、計9回開催し、さまざまな政策提言などにつなげた。今年度の公開セミナーは、この成果を引き継ぐものだ。東日本大震災の復興をめぐるテーマは多岐にわたるうえ、被災地が広範囲に及んでいるため、セミナーを通じて学会員が復興の諸相を知るとともに問題意識を共有して、被災者の再起や防

災・減災の意識啓発に役立てることができればと考えて開催している。

各回のテーマは次の通りだ。

- ① 5月20日(日)「東日本大震災と震災遺児」
- ② 6月10日(日)「想定見直し 首都直下地震」
- ③ 7月14日(土)「東日本大震災と高台移転」
- ④ 9月30日(日)「政策提言 原発避難」
- ⑤ 11月17日(土)「東日本大震災と幸福指数」(仮題)
- ⑥ 2013年2月16日(土) テーマ未定
- ⑦ 3月16日(土) テーマ未定

奥尻島復興研修会レポート  
大会・企画委員会と復興支援委員会共催  
津波災害からの復興のプロセスを聴く

大会・企画委員会と復興支援委員会共催の復興研修会が、2012年7月1日(日)～7月3日(火)の3日間、北海道奥尻島にて開催された。室崎会長をはじめとする会員8名、同伴者5名が参加した。

奥尻島は1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震の最大の被災地である。津波、斜面崩壊、火災などにより198名の死者・行方不明者を数えた。昨年の東日本大震災発災以降、防災集団移転、盛り土造成による集落再生、防潮堤の建設、産業の再建、生活再建支援策といった観点からの視察が相次いでいる。

研修1日目は、島内で最も被害の大きかった青苗

地区を視察した。犠牲者の追悼と災害経験の継承を目的として2001年に建設された奥尻島津波館の見学、人工地盤、防災集団移転後の集落の現状、6メートルの盛り土により造成された町並みを歩いた。2日目には、最大高さ11メートルの防潮堤見学など、バスで奥尻島を一周し、島の現状を視察した。途中、奥尻町役場では、復興事業に携わった職員から当時の苦労話や昨年来の視察ラッシュの説明を受けた。陸前高田市の参加者からは、住民の合意形成に向けた行政の役割を中心に活発な質問がなされ、大いに参考になったよ

うである。夕方には、本年結成された奥尻島の「語り部隊」メンバーや、行政・観光関係者を迎えた座談会も開かれ、災害当時の話や復興過程での苦労話などを伺うことができた。

震災から19年、例にもれず人口減少に歯止めはかからないが、フットパスと呼ばれる散策路の整備や語り部養成、養殖事業やワイナリー建設など、漁業と観光という島の主要産業の活性化に向けた挑戦が続いている。



## ◆ makenaizone.jp

昨年の春、311のあと途方に暮れながら診療しているクリニックに、被災地NGO協働センターの村井雅清さんから段ボールが届いた。何だろうと箱を開けてみると、果たしてカラフルな「まけないぞう」が沢山出てきた。そのとたん、待合室の患者さんの顔がパッと明るくなった。

私はペインクリニックという痛みの外来の開業医をしている。箱を開けたとたん痛みのある患者さんから一斉に歓声が上がったのだ。

青木クリニック 青木正美  
311で東京は揺れに揺れた。復興も遅々として進まない、福島原発の事故も見通しがたたない。けれども、自分には役に立つような手伝いもできない日々だった。

「そうだ！まけないぞうを応援しよう」。同じように思ってくださった患者さんたちと、makenaizoneという応援団を作る事になった。

ロゴマークを考えてくれる患者さん、タオル集めに奔走してくれる患者さん、私の幼なじみが編集長に

なってホームページも作った。編集長はオーストリア在住のため、記事はなるべく英語とフランス語に翻訳をしている。

昨年7月には我謝京子監督とともに

東北に行き、被災地NGO協働センターの増島智子さんの案内で、実際に「まけないぞう」を作っておられる避難所や仮設住宅を回った。それが『311、ここに生きる』というドキュメンタリー映画になり、昨年の第24回東京国際女性映画祭に招待されて、映画祭の初日グリーンカーペットを「まけないぞう」と共に歩



くことになった。

「まけないぞう」を通して、被災地と繋がっている。「まけないぞう」を見る度に被災者のことを思い出す。「まけないぞう」は、被災地と私たちの心の架け橋なのだ。わたしはmakenaizoneを通じて、これからも世界中に「まけないぞう」発信し続けてゆこうと思っている。

## ◆ チーム北リアス

大阪大学大学院人間科学研究科教授 渥美公秀

チーム北リアスは、岩手県九戸郡野田村で活動している諸団体・個人が結成したネットワーク団体です。主な構成団体は、八戸工業高等専門学校など八戸勢、弘前大学人文学部ボランティアセンターなど弘前勢、(特)日本災害救援ボランティアネットワーク、関西学院大学、大阪大学、京都大学などの関西勢で、4人の共同代表により運営されています。昨年8月に、地元の方のお世話で、事務所、倉庫、宿泊施設を備え

た現地事務所を野田村内に開設しました。震災前から、野田村で様々な活動をされてきた地元の方に現地事務所長をお願いし、本年度からは、休学して活動に専念している大阪大学生が常駐しています。

チーム北リアスは、各方面からのボランティアを受け入れ、仮設・見なし仮設住宅の見守り、集会所等での交流、復興に向けた話し合いの場の設営、村の様々な会合やイベントへの参加などを行うとともに、地域

見守り勉強会、地域FM研究会などを地元の方々と一緒に展開しています。また、メンバー間で行う研究会では、発災前後の野田村について記録していく作業も行っています。メンバーは、ロゴの入った淡い緑のジャンパーを着て活動しています。今では、この色を見ると、あちらこちらで声をかけてもらいます。

復興に向けて、声を出せない方々も含めて住民お一人一人の想いに寄り添

い、くらしに届くよう活動を深めていきたいと考えています。

活動は長期にわたります。住民、行政、地元の諸団体・諸機関、そして、外部支援者としてのチーム北リアスが、緊張感をもって協働していくところから希望が見えてくればと願っております。



# 消 息

◆入会 ※カッコ内は所属  
▽有賀元栄(辰野町防災研究会)▽平川達也(松山大学)  
▽清野和彦(参議院国土交通委員会調査室)▽松ノ木祐一(大日本コンサルタント株式会社社会創造技術部社会政策プロジェクト室)▽林正憲(ひとりじゃないよPJ福井)▽城平守朗(鳥取県危機管理局)▽関川浩志(八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科)▽山崎智彦(NHK新潟放送局放送部)▽鈴木有(木の住まい考房)▽倉本佳世子▽谷田貝孝((株)東日本大震災事業者再生支援機構)▽加藤眞義(福島大学行政政策学類)▽田中勝子(近大姫路大学看護学部看護

学科)▽安倍祥(東北大学災害科学国際研究所地震津波リスク評価寄附研究部門)▽渡辺実((株)まちづくり計画研究所)▽伊藤尚子(日本赤十字看護大学看護学部)▽山川充夫(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター)▽清水修二(福島大学経済経営学類)▽西堀喜久夫(愛知大学地域政策学部)▽佐々木康文(福島大学行政政策学類)▽江尻行男(東北福祉大学総合マネジメント学部)▽岡田憲夫(熊本大学大学院自然科学研究科)▽峯元佳世子(甲子園短期大学生活環境学科特任教授)▽須藤宣毅(河北新報社報道部記者)▽北村育美(富岡町生活復興支援おだがいさまセンター)▽天野和彦(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授)●学生会員▽山本翔子▽鳥井静夫▽白倉隆之介▽池田一

橋浦悠二▽小河光治▽小林秀行▽川副早央里  
◆異動 ※新所属(旧所属)名前  
▽神戸新聞論説委員室(神戸新聞東京支社編集部編集委員)磯辺康子▽立命館大学政策科学部教(神戸大学大学院工学研究科)塩崎賢明▽関西学院大学災害復興制度研究所特任准教授((特非)レスキューストックヤード事務局長)松田曜子▽名古屋大学減災連携研究センター准教授(東京大学工学部都市工学科関沢研究室)廣井悠▽北陸学院大学人間総合学部社会学科准教授(金沢大学人間社会学域法学系特任助教)田中純一▽東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科准教授(新潟大学災害復興科学センター)福留邦洋▽日本損害保険協会生活サービス部次長兼安全安心推進グループリーダー((社)日本損害保険

協会中国支部事務局長)齊藤健一郎▽(一社)共同通信仙台支社編集部担当部長((一社)共同通信社社会部次長)所澤新一郎▽松山大学人文学部社会学科講師(東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻)森岡千穂  
◆開設 (社)減災・復興支援機構 = 東京都新宿区神楽坂2-12-1、ラインビルト神楽坂205  
◆寄贈本一覧 ▽『キャッシュ・フォー・ワーク 震災復興の新しいしくみ』岩波ブックレット817、著者:永松伸吾、発行所:岩波書店▽『原発と建築家 僕たちは何を設計できるのか。再生可能エネルギーの未来、新しい時代の建築を考えた。』編著:竹内昌義、発行所:学芸出版社▽『復興と支援の災害心理学 一大震災から「なに」を学ぶか』編著:藤森立男/矢守克也、発行所:福村出版

## 現場から from the Spot

### 止まった時間

共同通信仙台支社 所澤新一郎

表情が明るくなり、声が弾んでいた。「働かっていいですね」。岩手県の仮設住宅で暮らす30代女性が今春から仕事を再開した。勤め先の水産加工場が津波で流失、再建するのに伴い、戻った。生活のリズム、自分で稼ぐ生きがいができたことが笑顔からうかがえた。

一方で、あの日から時間が止まったままの人もいる。岩手県の別の女性は、

今も仕事をしていない。再開した元の職場から声が掛かったが「力がわからない」。1年前、道路が寸断されて小学生の娘の安否が数日間分からず、泣き叫んでいた。娘は無事だったが、わが家は流され、何もかも失った。元の職場へは車で山越えが必要だ。もうあんな思いはしたくない。失業手当の給付期間が切れても山越えをちゅうちよして

いる。

「そろそろ働いたら」「いつまでそうしてるの」。知人の言葉に傷ついた。会う人に近況を説明するのがうっとうしくて、外出も避けがちだ。見回りの支援者やボランティアが仮設を訪ねてくるのは苦痛という。「人と会うのがつらい」。イベントのチラシを渡されると「ありがとう」と言って受け取るが出向いたことはない。

宮城県60代女性はあの日、濁流にのまれた。家の柱につかまり、身体が不自由だった夫を懸命に右腕

で抱えていた。力尽きる瞬間、夫が「もういいよ」と告げ、腕から抜けて流されていった。その抜けた感覚がずっと女性に残る。

行方不明だった夫の死亡が最近になって確認された。「父が帰ってきて、ようやく母は落ち着いてきた」と娘さん。「これから、ですね」

東北3県の国道や店舗、商品にあふれる「がんばろう」のスローガンに違和感がある。まだ前へ踏み出せない人が被災地にはたくさんいる。